

2014年8月13日

米海兵隊太平洋基地司令官
チャールズ・ハドソン少将 様

公益財団法人 日本自然保護協会
理事長 亀山 章

沖縄県名護市辺野古・大浦湾は生物多様性が豊かであり、なかでも絶滅危惧種 I A 類(環境省)はその重要な要素です。この事業のために実施された環境アセスメントは全般的に科学性に欠ける問題のあるものであり、環境アセスメントの予測では、ジュゴンの本海域を利用しないと予測されていました。2005年から2008年まではジュゴンはこの場所を利用していませんでしたが、2009年以降は少しずつまた利用をしていることが、事業者の調査記録にもあります。しかし今年5-7月の市民調査の結果では、埋立予定地においてジュゴンの食痕が、たった2か月のうちに110以上見つかりました。埋め立て予定地周辺の海域にも利用記録があり、これまでの認識を大きく覆すことであると認識しています。

特に埋立予定地内の海草藻場にジュゴンがどれ位の頻度で来て、どのような種類の海草を採餌しているかを知ることは、今後の保全対策にとって重要です。実態に応じて事業者が予定している環境保全措置の内容も変更させる必要があります。

今回は エレン・ハインズ博士、レミュエル・アラゴネス博士をお招きし、長く日本でジュゴンの食痕や海草藻場について調査を行ってきた日本自然保護協会と北限のジュゴン調査チームザ・ンのメンバーが調査員として、埋立予定地に入り、ジュゴンの食痕の調査を行いたいと思います。

世界のジュゴンにとって沖縄の個体群は北限に位置します。北限のジュゴンの行動を知ることが世界的にも重要です。

以上の理由により、日米両政府が定めた普天間飛行場代替施設建設事業に伴う臨時制限区域への立ち入りの許可を受けたく、次のとおり申請します。